

2.1.5 弘道館

指定名称 旧弘道館

保護・文化遺産の種類 記念物（特別史跡）

教育遺産の類型 藩校

指定等により保護されている面積 34,105 m²

(1) 概要

19世紀初期から中期にかけて緊迫した内外情勢^{とくがわなりあき}に対処するため、水戸藩第9代藩主徳川斉昭は、藩政改革の一環として人材の養成を掲げ、藩士とその子弟のための教育機関として藩校弘道館を創設した。

水戸城内三の丸の重臣屋敷を移動させて整備され、天保12(1841)年に仮開館、安政4(1857)本開館した。また、天保14(1843)年に江戸詰め^{とくがわなりあき}の藩士のため、江戸小石川の水戸藩邸内にも学問所（江戸弘道館）が設けられた。



写真 2-30 弘道館（空撮）

藩校の建学精神は仮開館前の天保9(1838)年に、斉昭の名で「弘道館記」として公表されている。そこには「文武一致」、「神儒一致」、「学問事業一致」などの精神が明記され、現実の政治や社会に役立つ学問・武芸の修得を目標として掲げた。敷地は城内三の丸のおよそ32,000坪(10.5ha)で、藩校として国内最大の規模を誇った。

学校の運営は、藩の重臣から選任された学校総司・学校奉行が司り、そのもとで教授頭取（総教）が学校を統轄した。藩主も試験への臨場等、学校の経営に関わった。

藩士とその子弟は、文館への入学では、15歳になると入学試験を受け、合格すると弘道館で学ぶことができた（武館では特に試験は行われずに入学することができた）。30歳までは就学の義務があり、それから40歳までは日課が半分となり、40歳以降は任意となった。また、医学館では日を決めて町医や郷医も医学を学ぶことができた。弘道館に医学館を組み込んだところに、医学・医療を重視する斉昭の考え方がよく表れている。

空間構成・配置の特徴として、館内の主要施設の配置に建学精神に基づいた独自の工夫を凝らしているのが弘道館の大きな特徴である。敷地の中心点に「弘道館記」を刻んだ石碑「弘道館記碑」を納める八卦堂を置き、それに接するところに儒学の祖孔子を祀る孔子廟と、武神を祀る鹿島神社を配し（神儒一致）、学校御殿（正庁）を挟んで、正門からみて右（北側）に文館とその関連施設、左（南側）に武館三棟を建てたこと（文武一致）である。

さらに、敷地の中央部をいわば社廟区（宗教区）とすれば、学校御殿、文館、武館のほか医学館、天文台を含む場所を学校区、敷地西側一帯を調練区（実践訓練区）と呼ぶことができ、学校の機能を明確に3区分している。この点も他の藩校にはみられない弘道館の特色といえる。



図 2-6 弘道館の指定範囲と主な構成要素

(2) 主たる構成要素

ア 当初建造物

① 正門と附塀^{つけたりべい}

学校区の東端中央部に位置し、東面して建つ。弘道館の正門として建設され、常時開門せず、藩主臨場や特別な行事の場合にのみ使用された。総檼造りの四脚門で、妻側面に渦彫刻のある海老虹梁^{えびこうりょう}を架け、禅宗様の意匠を採用している。正門南北には附塀が延びている。

※P49 表 2-5 参照



写真 2-31 正門

② 正庁

学校区の中央部に位置して、東面して建つ。学校御殿とも呼ばれる弘道館の中心建築の一つで、藩主が正席の間に臨席し、正席の間や二の間では学問の試験、正庁に隣接する対試場では武術の試験を行う最も格式のある施設。格調高い書院建築となっており、式台（玄関）から板廊下を経て上手に3室が置かれ、湯殿・便所が付属する（湯殿・便所は復元）。下手は会所や随行者が控える控室であった。外壁は漆喰で主部と正庁は明障子とし、式台



写真 2-32 正庁（手前の広場は対試場）

部は漆喰、湯殿・便所は板壁、内壁には経師紙が用いられている。正席の間の縁側上部には、斉昭自筆の書「游於藝（げいにあそぶ）」の扁額が掲げられている。芸とは礼（礼儀作法）、楽（音楽）、射（弓術）、御（馬術）、書（習字）、数（算術）の善性を養う要素である六つを指し（六芸^{りくげい}）、武芸に凝り固まらず、悠々と芸の道を究めるという意味を表している。

③ 至善堂^{しぜんどう}

学校区の中央部に位置して、東面して建つ。渡り廊下で正庁と接続されている、藩主臨場の際は休憩所、そのほかの場合は藩主子弟の勉学所でもあった。『大学』の一文「人間は最高善に達し、かつその状態を維持することを理想とすべきである」から斉昭が「至善堂」と命名した。正庁と一体となって機能する建築であり、平面と屋根も連続して連なるが、柱の大きさはやや小ぶりで、書院の様



写真 2-33 至善堂

式を留めつつ、軒高、棟高は正庁よりも低く抑えられている。

④ 番所

学校区の中央部の通用門の東脇に建ち、西面する。警備や見張りをする番人が詰めていた。壁は漆喰仕上げを採用している。近代以降は、券売所として利用されたが、現在は物品庫として使用されている。

⑤ 弘道館記碑

社廟区の西端中央よりやや南寄りに位置し、弘道館の精神的支柱となる碑である。この地点を中心に直径 280m の正円を描くと、弘道館敷地の正に中心にこの碑が設置されたことが理解できる。天保 8 (1837) 年、齊昭は側近^{ふじたとうこ}藤田東湖に弘道館記の起草を命じ、昌平坂学問所^{しょうへいざかがくもんじょ}儒者の佐藤一斎^{しょうこうかん}、彰考館總裁の会沢正志斎^{のぶゆき}と青山延子^{のぶゆき}の校訂を経て、天保 9 (1838) 年に公表された。天保 10 (1839) 年より碑への彫刻が開始され、記文の修正や彫り直しを経て、起草から 3 年後の天保 11 (1840) 年に完成した。碑面には、「文武一致」、「神儒一致」、「忠孝一致」、「学問事業一致」、「治教一致」という 5 つの建学の精神が示されている。



写真 2-34 弘道館記碑

建学の精神を内外に示すため、石材には真弓山（現常陸太田市真弓町）から切り出された白色寒水石（大理石）を用い、碑文の書体に力強い印象を与える隷書体を採用した。碑面上部に、王が仁政を全うする時にあらわれる霊獣、麒麟^{きりん}を配する。

⑥ 孔子廟戟門

孔子廟を囲む土塀の西面に開く。孔子廟は昭和 20 (1945) 年の空襲で焼失したが、戟門は類焼を免れた。

禅宗様を基調とし、重量感のある屋根の瓦葺形式は中国風の意匠をとりいれている。木部材は細目の小振りの門で、中央間の戸口上部にある火燈^{かとうよう}様の幕板と扉の鏡板が特徴である。孔子廟とともに朱舜水^{しゅしゅんすい}の聖堂模型の影響を受け、水戸藩の学問的伝統を継承している。



写真 2-35 孔子廟戟門

⑦ 要石歌碑

社廟区の東部中央よりやや南寄りに西面して立ち、
齊昭自筆の和歌「行く末も ふみなたがへそ 蜻島^{あきつしま}
大和の道ぞ 要なりける」と刻む石碑。常陸国一宮鹿
島神宮の「要石」になぞらえて「要石歌碑」と名付け
られた。日本古来の道徳を行く末まで伝えることが教
育の要であるという意味である。石碑の拓本は藩主子
弟の教育の場である至善堂にも掲げられ、「弘道館記」
とともに弘道館の教育理念を示している。



写真 2-36 要石歌碑

⑧ 鐘楼（学生警鐘）

社廟区の北東隅に置かれ、鐘楼に懸る釣鐘（学生警
鐘）は授業の開始，終了，行事等の際に合図として鳴
らされたといわれる。学生警鐘は，半鐘の一種であり，
通常は火の見櫓や寺院の軒先等につり下げられるが，
鐘楼につり下げられる事例は少ない。表面には注連縄^{しめなわ}
に 2 枚の神鏡が配置されるほか，「物学ぶ 人の為
にと さやかにも 暁告ぐる 鐘のこえかな」という齊昭自筆の和歌が万葉仮名で浮彫
され，教育に日本古来の文化を導入しようとする齊昭の思想を反映したものと考えら
れている。釣鐘は複製を製作し，平成 21（2009）年に交換した。当時の釣鐘は国老詰
所の展示室で展示されている。

⑨ 種梅記碑

社廟区の南西部に北面して建つ，齊昭自撰の
「種梅記」が自筆の隷書で刻まれた石碑。春に
先駆けて咲く梅が，当時の重要な教科であった
詩歌の良い題材となることや，軍事の際には非
常食として役立つことが記されている。中国の
故事で「文好む木」とされる梅は，学問に縁の
深い木とされ，齊昭は弘道館・偕楽園をはじめ
藩内各地に梅の植樹を奨励した。種梅記碑はこ
うした水戸藩による梅花奨励を示す石碑であ
り，梅を介して弘道館と偕楽園が一对の教育施
設として建設されたことを示す。



写真 2-37 種梅記碑

⑩ 堀・土塁

弘道館の西・北・南辺を仕切り，水戸城の曲輪^{くるわ}を兼ねる。遮蔽機能を有していた。
現在は，西部の堀・土塁が調練区の西側に，北部の堀・土塁の東半分が，学校区の北
側に現存する。

イ 復元建造物（昭和 28(1953)年～昭和 50(1975)年復元）

明治元(1868)年の弘道館の戦いにより、弘道館では文館・武館等多くの建造物が焼失した。さらに、太平洋戦争のさなかの昭和 20(1945)年 8 月の水戸空襲でも被害を受け、孔子廟や八卦堂、そして鹿島神社といった貴重な建造物が焼失した。

戦後、近世や明治時代の絵図のほか古写真等をもとに、焼失した建造物の一部を復元した。

① 国老詰所^{こくろうつめじょ}

学校区の中央部の至善堂の東側、正庁の北側に隣接して建つ。藩主の留守を預かる家老以下の諸役人が詰める施設で、明治元（1868）年の弘道館の戦いで焼失したが、昭和 38(1963)年に復元され、現在は弘道館展示室として活用されている。

② 八卦堂

弘道館記碑を風雨による侵食から防ぐための覆堂である。礫混じりの粘土層による版築で基壇を設け、その上に八角形の堂を載せる。第 2 代藩主光圀が將軍徳川家光から下賜された「文昌星」像を安置するため、江戸小石川藩邸の後楽園内に造営した八卦堂を模したとされる。一般に八角円堂は貴人の菩提に関わる堂宇であるが、弘道館では弘道館記碑を安置し、弘道館の精神を伝える碑の重要性を示している。軒下には万物変化の相を示す八卦の算木を配し、その堂内に万古不動の日本の道を説く弘道館記碑が置かれているという構成に、斉昭の宇宙観が込められている。昭和 20(1945)年の太平洋戦争で焼失したが、昭和 28(1953)年に焼失を免れた基壇の上に復元された。



写真 2-38 八卦堂

③ 孔子廟

社廟区の北東部に西面して建つ。徳川光圀^{しゆしゆんすい}が朱舜水に命じて造らせた模型を原型とし、建築の様式は禅宗様の社寺建築に倣っている。屋根飾は明・清時代の中国の手法に従ったと記録があり、火災除けの意味を持つ鬼状頭（龍頭魚尾で頭から水を噴出する）と聖人の徳を感じて現れる鬼龍子（虎に似た霊獣）が配置される。昭和 20(1945)年の太平洋戦争で焼失したが、昭和 45(1970)年に復元された。



写真 2-39 孔子廟

④ 鹿島神社

安政 4 (1857) 年 5 月 9 日に催された弘道館の本開館式の際、常陸国一宮鹿島神宮の祭神である武甕槌神^{タケミカヅチノカミ}を分祀した神社。斉昭自らが鹿島神宮の神剣を模して鍛えた太刀を奉納した。社廟区の南部に北西に面する。弘道館の主要施設が N-20° -E の主軸をとるのに対し、鹿島神社の主軸は N-20° -W と南東に向く。これは、鹿島神宮本社殿に向かって遥拝するためと考えられる。昭和 20(1945)年 8 月 2 日の戦災で手洗井戸を残し、創建時の建造物は焼失したが、昭和 49(1974)年の第 60 回伊勢神宮式年遷宮^{しきねんせんぐう}の折に伊勢神宮境内別宮「風日祈宮」^{かざひのみのみや}の旧殿一式が特別譲渡されることになり、昭和 50(1975)年に移築された。



写真 2-40 鹿島神社